



東洋インキ株式会社の海外展開

東洋インキ株式会社
グローバルビジネス本部 パッケージ部
田口 政則

【東洋インキグループとその歴史】

東洋インキグループのスタートは、1896年に創業者 小林謙太郎が東京市日本橋本銀町（現在の東京都中央区日本橋本石町）に個人経営の「小林インキ店」を開業したことに始まります。その後1907年に株式会社へ改組し「東洋インキ製造株式会社」に改称、「印刷インキの製造販売・印刷用付属品の販売 及び これに関連する業務」を営業品目として定款に定め、同時期に「羽獅子マーク」を商標登録しました。現在は、この「羽獅子マーク」が弊社を代表するグローバルブランドにまで育っています。



『羽獅子マーク』



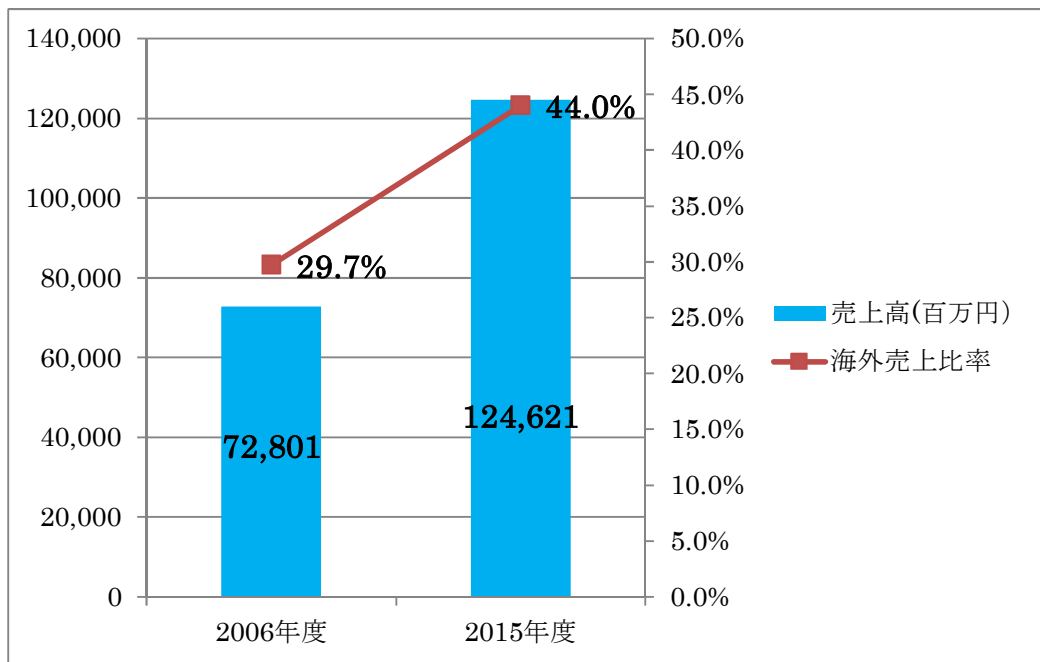
『大正13年（1924年）当時の京橋本社』

以来、100年を超える歴史を有していますが、主要な営業品目はオフセットインキ・グラビアインキ・フレキソインキを始めとする印刷インキのみならず、有機顔料・プラスチック用着色剤・カラーフィルタ用材料・缶用塗料・樹脂・粘接着剤・塗工材料等、多岐に渡っています。また、2011年には持株会社制へ移行し、東洋インキ(株)・トーヨーカラー(株)・トーヨーケム(株)を中核事業会社として「色材・機能材関連事業」「ポリマー・塗加工関連事業」「印刷・情報関連事業」そして「パッケージ関連事業」の4つのセグメントで事業活動を行っています。

【東洋インキグループの海外展開】

1907年の株式会社発足から僅か3年後の1910年には、海外（清国・韓国・タイ）へ販路拡大するなど積極的な海外展開を図ってきた弊社ですが、株式会社設立100周年に当たる2007年に発表した中期経営計画において、10年後の海外売上高比率50%を目標に更なる事業展開を図った結果、この10年で14%伸長する成果を得ました。（2015年度海外売上高比率：44%／中期経営計画開始年度2006年度海外売上高比率：約30%）

その中でも、食品パッケージ等に使われるグラビアインキ・フレキシインキは、国内外で今後も成長が期待できる分野として、その需要の取り込みに注力しています。



『東洋インキグループの海外売上高と海外売上比率の推移』

【グラビアインキ・フレキシインキの事業展開】

グラビアインキ・フレキシインキについては、1929年に日本国内への輸入販売を開始しています。終戦後、占領軍将兵に支給される食糧・飲料・菓子類等の包装には、セロファン・ビニル・ポリエチレン等が使用されており、従来の日本にはなかった華麗な印刷物で保存性も高いものでした。将来的にグラビアインキが伸びていくと判断し、海外から技術導入を進め、1947年から国内での製造販売を開始しました。また、1971年の韓国における製造販売開始を皮切りに海外展開を加速させ、現在では世界13か国（日本を含む）で製造販売を行っております。2000年代までは韓国・中国・東南アジア（タイ・マレーシア・シンガポール・インドネシア・フィリピン・ベトナム）のアジア地域での事業を展開してきましたが、近年ではアメリカ・ブラジル・インド・トルコ等のアジア以外の国・地域へも展開を図り、グローバルでの供給体制を整えています。



◆各エリアの製造拠点（一部抜粋）



『東洋インキ(株) 埼玉製造所』



『上海東洋油墨制造有限公司』



『TOYO INK (THAILAND) CO., LTD.』



『TOYO INK INDIA PVT. LTD.』



『TOYO INK AMERICA, LLC』



『TOYO INK BRASIL LTDA.』



『TOYO PRINTING INKS INC.』（トルコ共和国）

【グラフィインキ・フレキシインキ事業の強み】

弊社の包装用グラフィインキ・フレキシインキ事業の一番の強みとして『ウレタンを始めとする樹脂開発力』があります。ウレタン樹脂開発をベースにラミネートインキのフィルム汎用性を実現したことで、ノントルエン化・水性化といった環境対応技術で食品包装用グラフィインキ業界をリードしてきました。

その他にも、グループ内に製版事業（プリプレス）・ラミネート接着剤事業（ポストプレス）を有するなど競合他社にない特徴を活かし、お客様へ『プリプレス - オンプレス - ポストプレスの各工程を通じたトータルサポート』機能を発揮し続けています。

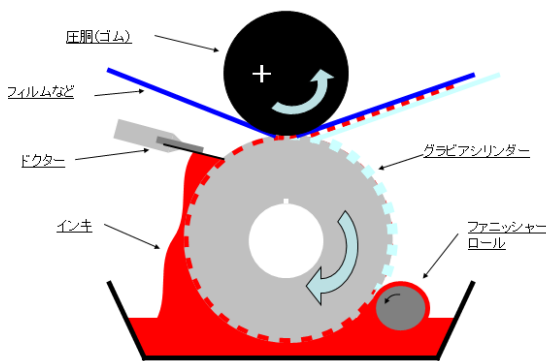
印刷ソリューションの進化を総合的にプロデュース Producing evolutions related to general printing solutions.



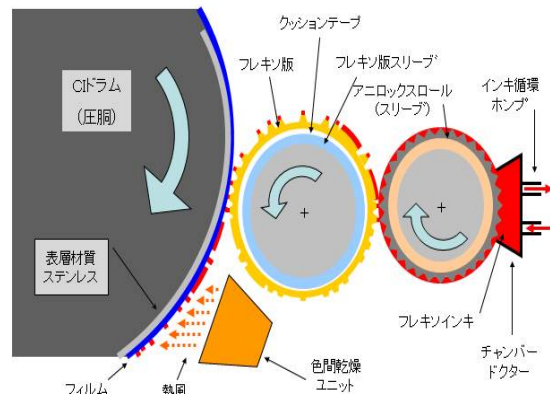
【世界の包装市場の動向】

グローバルでの包装用インキ需要の増大を背景に、インキ出荷額では今後数年で商業印刷用インキを越える見込みです。(成長率 グローバル：3 - 4%/インド・中国などの新興国：5%以上)

アジアでの軟包装分野の印刷方式はグラビア印刷が主流ですが、欧米ではフレキソ印刷が主流であり、同じ食品メーカーのパッケージでもエリアによって印刷方式が異なることが見られます。



『グラビア印刷メカニズム』



『フレキソ印刷メカニズム』

【パッケージ用インキの事業課題】

◆食品の安心・安全へ向けて

食品包装用インキに関する法規制 Swiss Ordinance : SR 817.023.21 が 2010 年にスイスで発効され、安全意識の高い欧米だけでなく新興国にもその影響が波及しています。この規制はインキ材料について使用可能な物質を限定し、更に使用される個々の原料についてもマイグレーション（内容物への移行量）を厳しく制限しているものです。

この Swiss Ordinance に加え、自主規制を設けて運用する大手グローバル食品メーカーやパッケージメーカー（コンバーター）が増えてきたため、弊社も Swiss Ordinance を始めとした世界各国の安全性に関する規制に準拠したインキの開発・販売を加速しています。

◆地球環境への負荷低減の貢献

石油系溶剤はインキの原料として長く使用されてきましたが、その中には揮発性の高い有機化合物（VOC : Volatile Organic Compound）が含まれています。VOC は化学オキシダントと浮遊粒子物質 SPM の主な原因となり、大気汚染を引き起こし、気候変動枠組条約による削減対象の温室効果ガス（二酸化炭素等 6 種類）及び 関連ガス（NO_x・CO₂・VOC・SO₂）の一つでもあります。2015 年 COP21 のパリ協定 Paris Agreement により、温室効果ガス削減の取り組みは全世界の国・地域を対象に拡大されました。

弊社は接着剤やインキ等を製造する化学メーカーとして、石油系溶剤の低減に最優先で取り組み、食品包装材中の残留溶剤低減やVOCの発生量の削減はもちろん、地球環境負荷を低減するため水性インキに注力しています。

また、drupa 2016（ドイツで行われる世界最大規模の印刷関連展示会）においても軟包装水性フレキシソをメインに展示し、注目を集めました。



『drupa 2016 東洋インキグループ展示ブース』



『水性フレキシソ使用パウチ』

◆食糧廃棄物の削減（SAVE FOODの動き）

1969年、人類が初めて月に降り立った月面探査機アポロ11号には、宇宙飛行士の食事としてレトルトパックのポトフが積み込まれました。その後、レトルト食品は宇宙から家庭の食卓へ広がることとなります。

高圧加熱殺菌できるレトルトパウチは、保存料を使用することなく食品を長期間保存することができます。食糧廃棄が問題視されている今日、食品の賞味期限を伸ばすことで食糧廃棄を少しでも減らすこと、また人口が増大する新興国においては、衛生的な食品を人々に届けることは社会的な重要課題となっています。

今後、エネルギーを使う冷蔵冷凍設備や保存料を使用することなく、食品の長期保存を可能にするレトルトパウチは世界に広がって行くと予測されます。

東洋インキグループは、1970年代からレトルト包材用インキのパイオニアとして食品メーカー・パッケージメーカー（コンバーター）の皆様と共に包装材の技術開発に取り組み、現在、溶剤型グラビアインキ・フレキシソインキ、水性グラビアインキ・フレキシソインキの全分野でレトルト可能なインキをラインナップしています。



【最後に】

弊社は「世界にひろがる生活文化創造企業」を経営理念に掲げております。

私たちの生活に欠かせない食品パッケージにおいて、インキはパッケージに彩りを与え、情報だけでなく様々な機能を付与する役割を担っております。

日本国内だけでなく海外の各エリアにおいて、市場ニーズに合わせた環境調和型グラビアインキ・フレキシインキを提供し続けることが皆様の生活に貢献できることと信じ、これからも新製品開発と社会貢献を継続していきます。